

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一15:29～34 「目をさまして」

[29]「もしこうでなかったら、死者のゆえにバプテスマを受ける人たちは、何のためにそうするのですか。もし、死者がよみがえらないのなら、なぜその人たちは、死者のゆえにバプテスマを受けるのですか」

「死者のためにバプテスマを受ける」の意味については様々な解釈がある。①死んだ者の墓の上で故人をしのいでバプテスマ（洗礼）を受ける。②死者の生前の熱心な祈りのゆえに悔い改めて信仰を持つに至り、その人との天の御国での交わりを期待してバプテスマを受ける。③キリストのために迫害を受け、殉教し、死者の仲間に入るためのバプテスマを受ける。④教会員になるつもりで洗礼準備をしていた者が急に亡くなった場合、代理の者が、その死んだ人に代わってバプテスマを受ける。④の場合はバプテスマを受けなかった者は天国に入れず、信者としての祝福からも除外されるという誤った迷信的な考えから出てきている。以上のような解釈に対して、パウロはもしそういうことをしていたとしても、復活がなく、死人がよみがえらないのなら、そのような習わしにいったい何の意味があるのかと問うていることになる。

[30]「また、なぜ私たちもいつも危険にさらされているのでしょうか」

もし死者の復活がないのなら、福音を宣べ伝えるために危険にさらされている私や他の伝道者たちはいったいなぜそうしなければならないのかとパウロは迫る。

[31]「兄弟たち。私にとって、毎日が死の連続です。これは、私たちの主キリスト・イエスにあってあなたがたを誇る私の誇りにかけて、誓って言えることです」

パウロの使徒としての労苦は毎日が死の連続と言えるものであった。→Ⅱコリント11:23～27 それは彼らを救いに導いた彼の誇りにかけて誓えるほどのものであった。

[32]「もし、私たちが人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。もし、死者の復活がないのなら、『あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか』ということになるのです」

この表現は実際に彼が獣と戦ったというのではなく、獣のようなすさまじい迫害にエペソで出会い、それと戦ったという意味。→使徒19章 このようにしてまで迫害や苦難を耐え忍ぶのが人間的な動機からだとするのなら、そこにいったい何の益があるのか。

ここでパウロはイザヤ書22:13を引用して、復活がないならばそのような生き方は毎日を飲み食いだけで過ごす快樂主義に陥ることを指摘する。

[33-34]「思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣が損なわれます。目をさまして、正しい生活を送り、罪をやめなさい。神についての正しい知識を持っていない人たちがいます。私はあなたがたをはずかしめるために、こう言っているのです」

パウロは死者の復活を否定する人々によって、クリスチャン本来のあるべき生き方が損なわれることを警告する。そしてそのような人々の影響を受けて罪深い生活を送っている人々にはっきりと、目をさますこと、正しい生活を送ること、罪をやめることを命じる。

「神についての正しい知識を持っていない人たち」とは、死者の復活を否定し、いかにも自分がたいした神学者、いっばしの知識人であると気取っていた者たちに対する非難のことばである。彼らは確かに神についての正しい知識を持っていない。

「私はあなたがたをはずかしめるために、こう言っている」とは大変厳しい言い方であるが、福音の内容に対する誤解がいかにも深刻な結果をもたらすかをパウロはよく知っており、それを責め、戒め、正しい信仰に立ち返るように彼はあえてこのようなことばづかいをするのである。

私たちもこの世の哲学やさまざまな人間的な考えに惑わされることなく、正しい信仰に堅く立って動かされることなく、いつも主のみこころにかなった歩みをしていくことが大切である。→ I コリント15:58